

## 新刊紹介

### ニコラウス・コペルニクス

#### —その人と時代—

ヤン・アダムチェフスキ著

(小町真之・坂元多訳, 日本放送出版協会  
1973.10 発行, B6 版, 234+2 ページ)

コペルニクスの「天球の回転について」の序文を見ると、「9年どころか、その4倍も」その原稿は彼の机のひきだしに眠っていたとある。その理由として、ある人はコペルニクスの引込み思案、臆病を挙げる。しかしこの理由は推断であり、そんな推断を引き出す前にわたしたちは彼の生きた環境、当時の社会といったようなものを十分理解しなくてはならない。500年近い以前の人間社会は、アメリカ式の現代の生活になれたわたしたちが簡単に推量できるものではない。

コペルニクスの名を耳にすると、わたしたちは直に「天文学者」のイメージを描く。しかしそんな職業分化はまだなかった。彼はルネッサンスの時代にふさわしく、多方面に活動している。この天文学研究以外の方面での活動は、また活動せざるを得なかったのは時代と環境の要請であったはずである。彼が生れた時代、彼が住んだ土地、当時の複雑な政治と国境、そんなものについてわたしたちが十分な知識を持たない限り、コペルニクスを理解することはできないといえよう。彼の時代とその人物とについて記された数少ない書物の一つ、それが本書であり、その日本語への訳者もまた本書の持つ上記のような意義を認めて、その日本語訳に従事されたという。原著はコペルニクス生誕500年を記念してポーランドで出版された Jan Adamczewski: *Nikolaj Kopernik i jego epoka* の英語版である。著者は1923年生まれジャーナリストで、ポーランドの古都クラカウで活躍している人である。特定の独断に陥ることなく叙述しているので、コペルニクスの人物とその時代について知り、わたしたちがそれぞれコペルニクスの人物像を描くための、そしてコペルニクスを理解するための無二の好著といえよう。

本書は 1) ふるさとの国, 1473-91 2) 王都にて, 1491-95 3) イタリアの空のもと, 1496-1503 4) さいはての地で, 1503-1543 の四部に分けてコペルニクスの一生を追跡しながら、当時の社会的、政治的情勢を説明するという叙述法をとっている。「ふるさとの国」はその幼年時代を、「王都にて」はクラカウでの勉学時代を取り扱っており、この時代にコペルニクスの人物が形成

されるわけである。王都はもちろん当時のポーランドの首都のクラカウであり、コペルニクスはその大学に学んで天文学に興味を持つようになったのである。「イタリアの空のもと」はコペルニクスの留学時代で、ルネッサンスの波によって彼が触発されたと考えられる時期、そして「さいはての地で」は故国にもどり沼沢にかこまれたワルミアでの生活、イタリアで得たところを生かしつつ、時代の波に如何に対処していったかを述べている。

馬の背でゆられながら司教区視察の旅をしなければならなかった人、迫り来るテュートン騎士団からのオルシチンの防禦、四圍より流入する粗悪通貨に対処するために起草した貨幣論、そこには「悪貨は良貨を駆逐する」という有名なグレシャムの法則がその約30年以前に既に述べられている。時代がコペルニクスに要請した各種の雑務の遂行、さいはての地はさびしい何の事件もない場所ではなかった。フロンボルクの聖堂参事会員は閑職であり、従って36年にわたる大著原稿の温存は全くコペルニクスの性格から来たと飛躍する以前に、わたしたちが考慮しなくてはならないコペルニクスの生活に関する問題はあまりにも多い。

本書は地動説の解説書ではない。従って天文学に関する説明はほとんどない。然し地動説を主張した人がどんな境遇にそったか、それは文化史的に天文学を見ると、是非解決しておかなくてはならない問題であり、本書の一読は本会会員にとって非常に有益であると考えられる。本書各章につけられた訳者がつけた註もまた行きとどいている。(広瀬秀雄)

(124頁よりつづく)

ものであるらしい事が観測的に示された。しかしこれはコロナ加熱に必要な熱を伝達する事は出来ない。網目構造を作るスピキュラーブラジットが主としてコロナを加熱する機構である可能性が高い。

このように彩層の微細構造とその時間的変化の観測から太陽大気中のプラズマ現象が実際にみえはじめてきた。現象の主役を演ずる磁場の構造はH<sub>α</sub>や軟X線にみられる微細構造から詳しく論じられるようになった。観測は今後増々時間的、空間的分解能をよくする方向に進むであろう。その極限は空間的には光球のスケールハイトの100km時間的には1秒の程度と考えられる。そのためには地球大気擾乱から逃れる必要があり宇宙空間に於ける大型望遠鏡が要求される。これらの観測の究極の目的は地球に最も近い天然の実験室である太陽のプラズマと磁場のふるまいを理解し他の天体や宇宙空間に於ける複雑な現象の把握の出発点とする事にあるだろう。

(ここに示した写真はアメリカビッグベア太陽観測所に於いて得られたものである)。